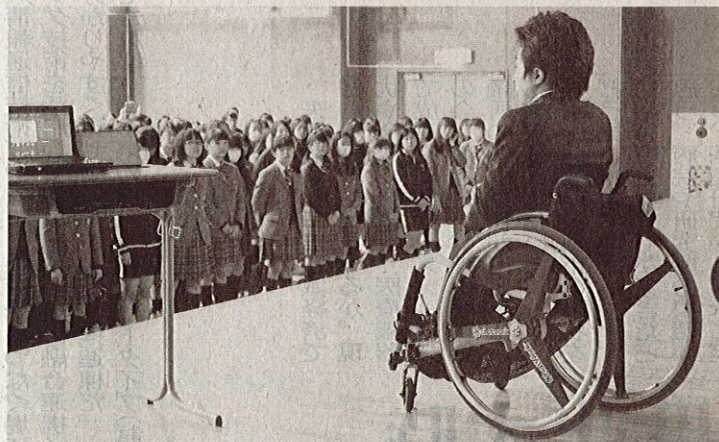


新興人図鑑

弱みを強みに変える。誰もがかなえない理想だ。ミライロ社長の垣内俊哉さん(27)は歩けない。その弱みをユニバーサルデザインの設計に生かしている。「性格上の欠点やコンプレックスも強みに変えられる」。しなやかな発想と徹底した合理主義。「ユニバーサル」という言葉の本当の意味がそこから見えてくる。

生まれつき骨がもろい。さんに営業をやらせた。く、骨折と手術を20回。戸惑いながらも回り続けた。小学4年生までは、契約はトップになった。歩けたが、その後は、車いすの営業マンと車いすの生活になる。「歩いて顔を覚えられたのさ」と強く思った。だ。「歩けないことに胸リハビリに専念するため、を張れ」と社長に言われた。高校を中退したがかなわなかった。「歩けなくてもできなかった。高卒認定試験を経て、車いすでも通いやすい立命館大学に合格する。転機は大学時代のアルバイトだった。バイト先の社長は垣内

「バリアーをバリューに」 ミライロ社長 垣内俊哉さん(27)



かきうち・としや 岐阜県出身。2010年にミライロを設立。ホテルや鉄道、銀行、自治体などへのコンサルティングや障害者、高齢者対応の研修・検定を実施。16年、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会のアドバイザーに。「バリアバリュー 障害を価値に変える」(新潮社)を出版。

障害があるからできる

骨の病 小学生から車いすに

「から」歩けないから「できる」ことに気付いた。大学在学中の2010年に友人とミライロを設立。「未来の色」と「未来の路」が由来だ。最初は経営が苦しく「豆乳と野菜ジュースでしのいだ」が、16年5月期の年商は2億4千万円。「障害(バリアー)をなくす発想ではなく、価値(バリュー)に変える」ことで、誰でも不満や不安なく暮らせる。その考え方が広がり始めたのだ。例えば、取引先の一つである京王プラザホテル(東京・新宿)では障害者対応の「ユニバーサルルーム」10室の稼働率が8割を超える。「手すりやスロープを着脱可能に

顔覚えられバイトで営業トップ

して、利用者の希望に合わせてられるようにした。障害者限定の過剰な設備があたるとなることもある。無駄なコストを減らすことも大事な仕事だ。障害者に優しい社会は仕事でつくれると考える。そして、もうけることをとて大事にしている。「もうからないと持続できない」からだ。日本の人口の6%が障害者で26%が高齢者。高齢者のニーズは障害者のニーズを統合したもの。つまり、ユニバーサルデザインへのニーズは4千万人以上の巨大市場だ。「誰でも心と体に不自由さや生きにくさを抱えている。そのバリアーは市場になる」と垣内さんは

ユニバーサルな社会 自ら提案

就活の関連情報はこちらへ 18歳プラス面では就職活動中の大学生の疑問や不安にこたえる記事を掲載しています。関連情報を電子メール daigaku@nikkei.com.jpへお寄せください。

言う。「人見知りや仕事できない」。これ以上なが遅いといったバリアーい絶望だった。も、ビジネスでは誠実、垣内さんの抱える骨形「丁寧というバリューに変成不全症は遺伝性。父親も同じ病気だ。「子供を無関心か過剰の両極端授かれば高い確率で同じだ」という障害者への対応障害を持つ」。その時、を、「ほどよく向き合え子供が歩けなくても「死ねば格好いいくらいに思いたい」と思ってた。自分も「死ねばいい」と考え、ユ。自分が父親になる時ユニバーサルマナーの講習までに、生きていて良かった。自己検定を始めた。障害者つた子供が思える社会のニーズを集約して製品にしておきたい」。や街づくりに反映するサ日本財団パラリンピックや、街中の段差なクサポートセンターの顧客を地図情報で提供する間も務める。7日からアプリも作っている。オアシヤネイロ・パラリンピックが開始する。障害自認しようとしたことが個性になるユニバーサルな社会。その希望を抱き重ね、それでも歩けるえ、ブラジルに飛び。(大久保潤)

望みが絶たれた夜、病院の屋上に向かい柵をつかんだ。だが登れない。「自分分は飛び降りるつもり」

コラム「新興人図鑑」は随時掲載します。